



## 付 1 4 話 米国での留学へ出発 No.2

タクシーは数人の相乗り、降りる都合で最後となる。彼の住居は、ロサンゼルス国際空港から遠く離れ、ハリウッドとビバリーヒルズの間にあり、ただ町の名前は記憶にない。住所近郊で、運転手に頼み込んで電話をかけてもらう。運よく連絡が取れ、迎えに来てもらい合流。本当に幸運。知人の知り合いとはいえ、全く知らない人のところに、図々しく 2, 3 日宿泊をお願いするとは、今日では考えられない。当時は精神年齢が低く、まだ子供で怖いもの知らず。それでいて、シャイで人見知りをする。自分でも嫌になるほど複雑且つ自己中心的な精神構造である。

出会って直ぐに気が合い、A 君とは友人となる。若者の特権で、気が合えば直ぐにでも、十年来の友人のようだ。現在では、新しい友人は職場以外全くできない。A 君は若くしてアメリカに渡航、苦勞して英語を学び、就労ビザを取得、永住権を手にする。今の安定した生活を手に入れ、アメリカを楽しんでいる。それまで、人には言えない苦勞や屈辱があったと思う。無論、そんなことは一言も話さないが、勝手に想像して、尊敬する。彼は独身で、年齢は私より少し上、雰囲気も顔も若く、まるで学生のようなのである。私も大学では学生に良く間違われる。物事を深く考えないので顔が老けない。童顔のまま成長し、奥さんと歩くと姉さん女房ですかと良く言われた。当時の写真を見ると汚い恰好をした学生である。私が居候を決め込む前に、日本人 2 人がやはり数日間世話になったという。本当に頭が下がる。

1960 年代の若者の多くは、アメリカ文化にあこがれを持つ。当時、アメリカのホームドラマや西部劇、音楽、スポーツなど多くの番組がテレビで放映されていた。日本の日々の暮らしと比べ、豊かな生活を楽しんでいる。日本人でもアメリカンドリームが直ぐに実現できると思わせていた。あこがれから渡米した若者も多いが、厳しい現実直面し、挫折して帰国した若者もまた多い。そんな状況でも未来を信じ、歯を食いしばって努力したのだと思う。後から続く若者に少しでも支援できたらと言っていた。

打ち合わせのため、留学先の Gould 教授に電話をかけた。秘書によれば、夏休みで別荘に出かけ、2 週間程戻ってこないという。うーん、困った。「それまで、ここにいたら」と A 君に言われ、あっという間にロサンゼルスを楽しもうという気になった。折角あこがれのアメリカ、最もアメリカ文化を体現するロサンゼルスだ。この際ゆっくり見てやる

うと思った。今思えば、何と脳天気な人間だろうと呆れる。

A君の家は、コの字型の2階建、上下で6軒のアパートメントであったと思う。真ん中には泳げるプールがある。ロサンゼルスは雨がほとんど降らないし大きな川はない。基本的に砂漠気候である。そのためかプール付きの家が多い。プールのそばを歩いて玄関へ、アメリカの家らしく玄関即リビングである。脇にベッドルームとキッチン、バス・トイレ、結構広い間取りとなっている。無論、靴は脱がない構造、そこは日本人、彼も私も部屋の中は裸足である。

近郊は、中流家庭の白人が多く住み、アジア人はほとんど住んでいないとのこと。ロサンゼルスでは、そのころ既に人種ごとに固まって住み、コミュニティを形成している。当然、日系の人たちが多く住む町がある。何故か、彼はそこを嫌ってこの町に住む。近郊はダウンタウンと違い治安も良く、落ち着いた住みやすい町である。ただ、少し離れた幹線道路に出ると、多くのレストランや商店がたち並ぶ。近くにカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)があり、若者が多く集まる場所でもある。

ウイークデイの日中は、ダウンタウンやハリウッド、リトル東京など観光地に行く。お上りさんである。アメリカは車社会、公共交通はバスか飛行機を使う。現在は地下鉄だが、当時の市内交通はバスである。タクシーは日本のように流していない。観光客はレンタカーを使う。バスを使って目的地に行くのだが本数が多く、行き先を聞いても運転手は早口でなかなか理解できない。ダウンタウンから戻るとき、バス停を間違え、降車。またもトラブル。バスは来ず、約3時間歩く破滅になった。

彼の休曜日には、車で出かけた。大抵は彼の友人グループと行く。デイズニーランド、ユニバーサルスタジオへ車で遊びに行く。彼の車は、あこがれのフォード・サンダーバードでオープンカー、ただし中古車。ガソリンを振りまき、けたたましく走る。駐車するときはカギをかけない。聞くと、ドアが開いていれば壊されないし、何も置かなければ取られない。車は古いので持ってもいかなれない。最も安全で金のかからない防犯である。

サンタモニカの海岸にドライブに行った。オープンカーに乗って、フリーウェイや海岸通りを突っ走る。天気はピーカン、気分は爽快。これぞアメリカ。途中でバカでかいハンバーガーを食べる。でかいケッチャップの瓶がおいてあり、皆は大量にぶちまける。アメリカを満喫する。UCLA、何でもデカいがこの大学も広い。構内を回るツアーバスが走っていた。60～70年代のアメリカは自信に満ち溢れ、輝いていた。全世界の若者があこがれていた。もう、あの頃には戻れない。